

Oracle REPORT

Seminar Report

the report of Oracle OpenWorld Tokyo

グローバル・エンジニアリングにおける 人と情報アクセスの管理

千代田化工建設株式会社では、アイデンティティ管理ソリューション・スイートの「Oracle Identity Management」を用いて、約5,000人の従業員を対象とするID管理システムを構築しました。このシステムにより、プロジェクト単位での活動が多くて組織変更が頻繁なエンジニアリング会社における、柔軟性の高い統合ID管理を実現しています。

Oracle OpenWorld Tokyoのセッションでは、同社、ITマネージメントセンターのセンター長、増川 順一氏と、千代田化工建設グループのシステム会社であるITエンジニアリング株式会社の執行役員、加藤 亨氏が、統合的なID管理システムの必要性、システム構築によりどのように課題を解決できたか、運用管理面でどういうメリットが得られたかなどについて解説しました。



増川 順一 氏

千代田化工建設株式会社
ITマネージメントセンター
センター長

することを常に追求しています。そして、人間が情報システムを使う際に必要とされる管理の基本がIDです。ですからID管理は、当社にとって、たいへん重要な取組みです。」と、増川 順一氏は語ります。

同社は、エンジニアリング会社として初めてISO 27001の認証を全社で取得するなど、情報セキュリティ管理を重視してきました。ITシステム管理も、総務省基準とCOBITに沿って整備しています。国際的なプロジェクトを牽引する立場の会社として、内部統制にも積極的に取り組んでいます。

「それでもなお、エンジニアリング会社におけるID管理は、数々の困難を伴うものでした。」と増川氏は言います。

そうした困難の1つとして、管理対象となる人員が多くて出入りが激しいことが挙げられます。千代田化工建設の従業員は国内子会社連結で約5,000人ですが、たとえばカタールのLNGプロジェクトでは、現場でさらに7万人がプロジェクトに参加しているわけです。このようなプロジェクトが複数同時進行する上に、海外の設計子会社やジョイントベンチャー・パートナーも加わるのでプロジェクトメンバーはさらに多くなります。ITシステムの利用者だけを考えた場合でも、対象は約一万人の規模になり、IDを管理する仕組みを構築することが重要でした。「しかも、ITインフラやアプリケーションは多層化、複雑化しています。総合エンジニアリング会社には、多種多様な環境でのグローバル・オペレーションに対応できる、柔軟性の高い情報セキュリティ管理が不可欠です。」と増川氏は語ります。

01 プロジェクトをスピーディかつスムーズに進めるには統合ID管理が不可欠

総合エンジニアリング企業である千代田化工建設株式会社は、石油、天然ガス、LNGなどのエネルギーや、石油化学、化学、医薬品、一般産業設備といった幅広い分野で世界中に数々のプラントを建設しています。

その1つが、カタールに建設中の世界最大のLNGプラント(年産780万トン×6系列)です。世界86カ国から7万人が建設に従事したこの巨大プラントの第一系列は、2009年4月に運転を開始しました。全ての設備が完成する2010年には、カタールは世界のLNG需要量の37%を生産する世界最大のLNG生産国になると予測されています。

また、2008年9月には、厳寒の地サハリンでLNGプラント(年産480万トン×2系列)が完成しました。日本がロシア初のプロジェクトを5年かけてやり遂げたのです。

「千代田化工建設はエンジニアリング会社であり、最大の経営資源は人間です。人間が情報システムを活用して最大の能力を発揮

02 発行から廃止に至るIDのライフサイクルを管理

従来のID管理の状況と問題点を、運用管理者の視点から説明してくれたのは、ITエンジニアリング株式会社の加藤 亨氏です。ITエンジニアリングは、千代田化工建設グループのシステム会社としてシステム運用も一手に引き受けており、グループ全体の従業員のアクセス権設定や、社外のITシステム利用者へのID発行、アクセス権設定の業務などを苦勞しながらコントロールしてきました。

「従来は、ID管理のマスター更新を月1回の夜間バッチで処理していました。しかし、月末の夜間バッチはやることが多く、時間がかかります。バッチ処理中にトラブルが起きる場合もあり、翌朝の業務開始時刻に更新が間に合わないこともありました。」(加藤氏)

千代田化工建設は2000年にサーバーを横浜本社へ集約し、各



加藤 亨氏

ITエンジニアリング株式会社
取締役常務執行役員

拠点ではターミナルソフトのCitrix経由でアプリケーションを使えるようにしました。さらに、2003年にはエンタープライズ・ポータルシステムとグループウェアを導入し、2004年には全社の人事情報を戦略的に利用するために、ヒューマンリソース・データベースも構築しました。こうした環境を効率よく使いこなすために、全社統一のID管理が不可欠になっていたのです。

「2003年に、社外ユーザーへのID発行とディレクトリサービスを組み込んだMIDB（マスターID管理システム）というシステムを作りました。ところが、ID管理にかかわる問題が後を絶たず、原因を踏み込んで分析してみたところ、システムの利用は共通ファイルサーバーが一番多いことがわかりました。基幹アプリケーションは本社にサーバーを集約していましたが、当時はまだ、ファイルサーバーは各拠点や部門ごとに設置していたのでMIDBとは連動していなかった。取り組むべきなのは全社全システムであって、一部分だけ管理してもID管理での明瞭な成果にはつながらない、ということをつくづく実感させられました。」（加藤氏）

1人に複数IDが割り当てられている、IDの棚卸しができていない、不要なアカウントが廃止されていないなど、問題点も抽出することができました。

「やるべきことはまず、利用者の分類の仕方を整理したうえで全社で統一すること。次に、ID登録と改廃のプロセスも確立して、ID発行から廃止に至るライフサイクル管理をやらうと考えました。同時に、パスワード管理も統合すべきだと判断しました。」（加藤氏）

こうした考察の結果、ITエンジニアリングは全社統合ID管理システムの構築を千代田化工建設へ提案しました。

03 Oracle Identity Managementの プロビジョニング機能も高く評価

統合ID管理の構築は、2つのフェーズに分けて進めることになりました。第1フェーズは、千代田化工建設の従業員と、IT基盤が統

合されている国内子会社の従業員、合計約5,000人を対象にします。第2フェーズでは、現在別なシステムで管理している社外のプロジェクトメンバーのID管理を統合して一つのID管理システムにするという計画を立てたのです。

千代田化工建設とITエンジニアリングは、各種のID管理パッケージシステムを幅広く比較したうえで、3つの製品に絞って詳細検討をおこない、最終的に「Oracle Identity Management」を選択しました。

Oracle Identity Managementを選定したのは、千代田化工建設が社内システムを「Oracle E-Business Suite」で統一してきたため、ID管理とも連携しやすいと考えたことも1つの理由です。ID登録と改廃のプロセスを確立して、ライフサイクル管理をするという要件も満たしていました。

「クラスライブラリがあって、複雑なID体系を管理しやすいこと、また、人事システムなどからデータをもらって自動更新した結果を、他のシステムへ配信するプロビジョニング機能が優れていることなどもOracle Identity Managementの特長。また、オラクルが将来にわたってID管理へ真剣に取り組む姿勢を明確に示していることも、評価ポイントになりました。」と加藤氏は言います。

04 他システムへのアカウント配信で 全社IDを同期

2008年7月、本社及び国内子会社約5,000人を対象とするID管理システムが稼働を開始しました。

新システムでは、既存のMIDBから人事情報を取り込み、Oracle Identity Managementのデータを自動更新する作業を、日次バッチで実行しています。退職者のアカウントは翌朝までに確実に削除されるなど、いつでも最新の人事情報に則ったID管理ができるようになりました。

「パスワード管理も統合でき、管理業務に関わる工数は大幅に削減されました。Oracle Identity Managementのプロビジョニング機能により、アカウントを他システムへ配信して、全社でIDの同期がとれます。しかもこうしたID管理の動きはすべて証跡を記録して、監査人に提示できます。全社の情報セキュリティ管理が大きく前進しました。」と加藤氏は言います。

もう1つの大きな変革は、利用者が自分でパスワードをメンテナンスする仕組みに変えたことです。同じパスワードを使い続けている利用者にはメンテナンス作業を勧めるメールが何度も送信されますので、全員が必ず定期的にパスワードを変えるようになりました。そして、パスワードはプロビジョニング機能によって変更されると即時配信されます。これは、統合ID管理で一つのパスワードをメンテナンスすれば良いという利便性を提供できたことに繋がりました。

「ID管理を整備した効果は、ITインフラ全体に大きなインパクトを与えています。この成果を踏まえて、第2フェーズの『社外を含む一万人のID管理』へと進んでいきたい。これは、Active Directoryでできることではないので、オラクルのソリューションを利用することになるでしょう。」と増川氏は語ります。

オラクルには今後とも、大規模かつグローバル・オペレーションに対応できるID管理を実現するための革新的なソリューション提案が期待されています。